

2021年9月

今月の新着図書から

大井浩一『大岡信：架橋する詩人』（岩波新書，2021年）

高等科図書主任
林 知宏

谷川俊太郎らと並んで戦後を代表する詩人である大岡信（1931-2017）の評伝である。作者はジャーナリストらしく、生い立ちから始まり、どのように創造的な詩人が育っていったかを記す。そして、国内のみならず国外にも渡って他のジャンルの芸術活動者と共同作業してきた様子を、それぞれの時代の代表的な作品とともに紹介している。

私は、ある時期から詩を理解したいと思うようになっていった。若い頃は数学の論理的構築の魅力に取りつかれ、必死に勉強した。教員になってからも内容、方向性の相違はあれどもスタンスに大きな変化はなかった。あるとき、数学の才能に恵まれつつ、その一方で小説や詩などの創作活動にも意欲的な生徒に出会った。自分に欠けているものを持つ人に羨望の念を抱いた。人間の内面には、数学の論理とは異なる心情の世界が広大な場を占めている。それを言葉ですくいとることのできる人がいると気づかされた。そうした人（すなわち詩人）に少しでも共鳴したいという感情を持つようになってきたのである。

私にとって、何より大岡信は詩歌論の論者として存在してきた。アンソロジー『折々のうた』（岩波新書）の編者として何より有名だが、『うたげと孤心』（岩波文庫）、『紀貫之』（ちくま学芸文庫）、『詩人・菅原道真：うつしの美学』（岩波文庫）は、参考になる大切な書である。ただ、私は所詮アタマで理解しようとしてしまう。何かを体感することが、とかく後回しになりがちである。大岡信は菅原道真論の中で、「詩はもちろん単独の作者によって書かれます。しかしそれは、現実には、心を同じくする友人や理解者によって読まれること前提に書かれます」と述べる（先掲書173頁、大井193頁にも引用）。数学とある意味同じハードルの高さ（わかる人にはわかる）があるのかもしれないと思いつつ、「詩人は自己の想像力を解放することによって、さらに一層強く読者の想像力を解放しなければならぬ」（大井、43頁）という大岡自身の言葉を支えにしたいと感じる。

大岡信自身による『自選大岡信詩集』（岩波文庫）には、水をテーマとする詩が多く収録されている。故郷、静岡県三島の地理的条件によるという。詩集『故郷の水へのメッセージ』（1989年刊）の中に所収された同じタイトルの詩は冒頭次のように始まる。

地表面の七割は水 人体の七割も水
われわれの最も深い感情も思想も
水が感じ 水が考へてゐるにちがひない

あのバブル時代に流行の生活様式とは一線を画したいという欲求が読みとれる。同じ時間を体験し、同じ空気を吸った者として、こうした詩にもっと早く出会っておきたかった。